

ちしつがくてき しら いぎ  
地質学的に調べる意義～

黒曜石の主成分化学組成による分類がなされると、今後は、遺跡から発掘される黒曜石製の石器の主成分化学組成を求める作業に入ります。こうすることで石器に使用された黒曜石の原産地を特定することができ、先史時代の人々の交流・交易を解明することができるようになります。

この組成グループの分類作業において重要なことは、必ず現地へ行って、そこで周辺の簡単な地質調査をしながら、自分の手で黒曜石のサンプルを採取することです。これは、①黒曜石が溶岩(露岩)としてその場所に存在するのか、それとも②元の場所から転石となって移動し、広範囲にわたって分散・堆積した二次的なものであるのかを調べる必要があるからです。これらが意外と重要なことで、この地質調査を怠ると正確な大昔の交流が分からなくなってしまいます。

特に、二次的に堆積した黒曜石については、その分布範囲を慎重に調査する必要があります。その理由は、例えば、同一の化学組成を持った黒曜石が、先史時代の人々の居住地も含め広範囲(遠隔地)にわたって分散していた場合を考えます。実際は、先史時代の人々が、石器などに加工していた黒曜石を居住地の周辺で拾っていたのに、地質調査や分布調査を怠ったことで居住地周辺の産地を見逃し、そのため解釈を誤って、“交易によって遠隔地からもたらされた黒曜石”と本来あり得なかったはずの交易を勝手に作り上げてしまう可能性があるからです。

第三者が採取した黒曜石をそのまま分析し解釈するだけでは、そのような錯誤が生じる可能性があります。地質学的なアプローチを取り入れることで、少しでも間違いを減らし、より正しい(と思われる)先史時代の人々の交流をとらえることができます。(学芸員 向井 正幸)



南クマネシリ岳の崖錐堆積物調査。十勝地方の黒曜石の原産地発見に繋がる(上士幌町十三ノ沢上流)。標高970m付近。



置戸町所山での黒曜石の溶岩流の断面観察。原産地発見後の調査。新原産地の発見は現地調査で明らかにされる。



地学 Sheets

Asahikawa City Museum

旭川市博物館HP

